

# 参加・体験型人権尊重教育「Kタイム」

—川崎市の児童生徒の実態に合わせた実践事例集作り—

児童生徒指導研究会議

山内 浩正<sup>1</sup> 橋谷 由紀<sup>2</sup> 井上 教夫<sup>3</sup> 入江 恵美子<sup>4</sup>

## 要 約

これまで本研究会議では、人権尊重教育において、「人権感覚」の育成に参加・体験型学習が有効であることを実証してきた。本市には人権尊重教育の資料は多くあるが、それぞれの教師が気軽に手にとって活用することができる参加・体験型学習の資料が少ない。こうした現状を受けて、参加・体験型学習の実践事例集を作ることにした。

川崎市の児童生徒のための実践事例集であるので、川崎市のデータを基にして研究を進めることにした。そのデータとは、川崎市の児童生徒の実態についてのデータ及び参加・体験型学習に関して、経験豊かな教師のエクササイズ実施上の手立てについてのデータである。

誰にでも広く親しんで使ってもらおうと、本実践事例集を「かわさき Kタイム」と名づけた。Kには、「かわさき」「子ども」「かかわり」「気づき」「権利」というような意味を込めている。

「かわさき Kタイム」で主に育てようとしているのは、「人権感覚」である。この「かわさき Kタイム」は、本市で毎年発行されている「人権に関する知的理解」を育てる人権尊重教育の資料での学びと結びついて、「人権意識」、さらに「自分や他者の人権を守るための実践行動ができる」児童生徒を育てることへとつながっていくものである。

キーワード：参加・体験型学習、実践事例集、人権感覚、実態

## 目 次

I 主題設定の理由……………146	(4)セクションの決定・デザインの工夫……………155
1 本研究会議の取組……………146	3 実践事例集の利用イメージ……………155
2 川崎市の人権尊重教育資料……………146	(1)基本的なセクション……………155
II 研究の内容……………147	(2)その他のセクション……………157
1 研究の方法……………147	III 研究のまとめ……………158
(1)実践事例集の特徴と作成上の課題……………147	1 実践事例集完成に向けて……………158
(2)研究の構想……………148	2 実践事例集配付後の課題……………158
2 実践事例集作りの課題に対する取組……………148	参考文献……………160
(1)エクササイズの選定……………149	指導助言者……………160
(2)実態把握……………149	研究協力者……………160
(3)学びの位置づけ……………154	ダウンロード資料……………161

<sup>1</sup>川崎市立上丸子小学校教諭（長期研修員）

<sup>2</sup>川崎市立坂戸小学校教諭（研修員）

<sup>3</sup>川崎市立金程中学校教諭（研修員）

<sup>4</sup>川崎市立生田中学校教諭（研修員）

# I 主題設定の理由

## 1 本研究会議の取組 —参加・体験型学習の必要性—

平成13(2001)年4月の「川崎市子どもの権利に関する条例」施行以降、本研究会議では、条例の趣旨を実現するために、権利学習資料などを用いた授業実践や仮説の検証を行ってきた。各年度の研究内容は次の通りである。

13・14年度「参加・体験型学習を取り入れた権利学習を行うことで、自分を好きになり、自分に自信をもち、自分を大切にすることがもて、自尊感情は高まる」

15年度「子どもの実態に合った権利学習を展開することで、子どもの権利を身近にとらえて人権意識は高まる」

16年度「日常の教育活動における、様々な場面で参加型の権利学習を取り入れていくと、有用性が見られる」

本研究会議の研究の積み重ねから、次のようなことが検証されている。一つは、人権尊重教育として大切なことは、自尊感情<sup>1)</sup>を高めることである。二つめは、自尊感情を伸ばすためには、個人で学んでいくよりも、仲間と共に学んでいく環境を設定する方がより成果が大きいことである。三つめは、机上で読み書きをする学習よりも、体を動かしながら自ら気づいていく学習を展開する方が、より成果が大きい。つまり参加・体験型の学習が人権尊重教育に有効だということである。

## 2 川崎市の人権尊重教育資料 —実践事例集の必要性—

各学校における人権尊重教育は、子どもの権利に関する週間における実践などが工夫されているが、人権尊重教育をどのように行えばよいのかという点で依然戸惑いが見られる。そのため参加・体験型の学習についての認識を高めることを通して、更に人権尊重教育の充実に向けて取り組むことが必要である。

川崎市では既に人権尊重教育関連の資料をいくつか作成して、配付しており、その中には事例が含まれているものもある。主な人権尊重教育関連の資料を次に示す。

ア 「かがやき」(小学校低学年版)・指導資料付き	川崎市人権尊重教育推進会議
イ 「みんな輝いているかい」(小学生版)・指導資料付き	川崎市人権尊重教育推進会議
ウ 「わたしもあなたも輝いて」(中学、高校生版)・指導資料付き	川崎市人権尊重教育推進会議
エ 「はたらくひとびと」(小学生版)・活用指導集付き	川崎市人権尊重教育推進会議

また、実践事例集としては神奈川県「人権・同和教育の実践のために—人権・同和教育実践事例集(小・中学校編)—」があるが、冊数も各校数部ずつの配付であり、教師が日常的に手にする状況にない。川崎市の児童生徒の実態に合った、日々の教育活動の中ですぐに活用できる実践事例集を一人一人の教師が1部ずつ手にすることにより、はじめて実践が具体化されると考える。

したがって、本市において人権尊重教育の一層の深まりと、広がりをめざすためには、参加・体験型という特色を備えた実践事例集が必要であると考え、そこで研究主題を次のように設定した。

<sup>1)</sup>「自分自身に対する肯定的評価的な感情を意味するが、比較的客観性の強い自己評価に比べると、抽象的で感情的要素が強い。自尊感情が高い人は、障害を乗り越えて目標を達成しようとする傾向が強く、不安をあまり感じずに適切な対処行動をとることができるが、低い人はその逆の行動傾向を示す。」

(日本LD学会編 『日本LD学会LD・ADHD等関連用語集』 日本文化科学社 2005年 p.54)

## 参加・体験型人権尊重教育の実践事例集「K タイム」

実践事例集を作るための中心的な考え方として、本市で活用されている構成的グループエンカウンター<sup>2)</sup>（以後、SGE）を取り入れることとした。これは、実践事例集に載せるエクササイズ<sup>3)</sup>がSGEのものに限定することを意味してはいない。むしろSGEは、「ねらい達成のためには、何でも採用する」という折衷主義の立場であるため、様々な団体のエクササイズを取り入れた方が本実践事例集作りのねらいに合致すると考えた。さらに、SGEはクライアントに自己を肯定的に受け止め、行動変容を期待するカウンセリングをベースとしており、児童生徒の自尊感情を育て、自分や他者の人権を守るための実践行動をねらいとする人権尊重教育にこの点でも合致すると考えた。SGEの考え方や手立てを背景にして、参加・体験型実践事例集作りに取り組んだ。

## II 研究の内容

### 1 研究の方法

#### (1) 実践事例集の特徴と作成上の課題

本実践事例集の特徴を考えたとき、まず人権尊重教育の参加・体験型学習の例示が挙げられる。その他にも次のような特徴が挙げられる。まず人間関係育成の実践事例集は、既に書店に多く出まわっている。こうした状況の中で今回実践事例集を作るということは、川崎市の児童生徒たちに合った内容であることが求められる。そして教師がエクササイズの主旨などを理解しやすいものであることも大切な特徴である。また近年、新規採用教員が増えていることから、誰にとってもわかりやすいものでなくてはならない。最後に30ページという限られた紙面の中で、大切な情報がコンパクトにまとめられていることが求められる。

本実践事例集の特徴をまとめると次のようになる。

- ア 人権尊重教育の参加・体験型学習を例示したもの
- イ 川崎市の児童生徒の実態に合ったもの
- ウ 教師の関心をひき、使いやすいもの
- エ 新規採用などの教師にとってもわかりやすいもの
- オ 30ページの中に情報がまとめられたもの

5つの特徴から、実践事例集作成の課題を4つ設定した。

- i) エクササイズの選定
- ii) 実態把握
- ii) 学びの位置づけ
- iv) セクションの決定とデザインの工夫

セクションとは、書籍における章立てのようなもので、本実践事例集では次のようになっている。

<sup>2)</sup> リーダーの指示した課題をグループで行い、そのときの気持ちを率直に語り合うこと「心と心のキャッチボール」を通して、徐々にエンカウンター体験を深めていくもの。エンカウンターとは本音を表現し合い、それを互いに認め合う体験のこと。この体験が、自分や他者への気づきを深めさせ、人とともに生きる喜びや、わが道を力強く歩む勇気をもたらす。

（「構成的グループエンカウンター」<http://www.toshobunka.co.jp/sge/whats/>）

<sup>3)</sup> ふれあい体験と自他発見を深めるために行う課題。（國分康孝総編・「構成的グループエンカウンター事典」p.132・図書文化社・2004年）

「はじめに」「言葉の説明」「実態テスト」「使用のヒント」「マトリックス」「ベーシック情報」「エクササイズ8」「くわしい 森の仲間たち」「ふり返しシート」「アイスブレイキング」。(各課題についての説明は、「2 実践事例集作りの課題に対する取組」を参照。また各セッションについては、「3 実践事例集の利用イメージ」を参照。)

## (2) 研究の構想

4つの課題のもとに、図1のように実践事例集作りに取り組んだ。本実践事例集は川崎市の学校現場において参加・体験型の実践事例集が必要であるという現状から作成されることになった。従って、本研究の最終的な目的は、本実践事例集の完成にあるのではなく、実際に学校現場で活用されることにある。川崎市総合教育センター研究報告会をはじめ様々な機会、本実践事例集について広報し、活用されるよう努めることも大切である。

本市における人権尊重教育の参加・体験型学習を「Kタイム」と呼び、学校現場に広がっていくことを期待した。そのため本実践事例集の表紙にも「Kタイム」という名称を載せた。Kには、次のような意味が込められている。「かわさき (Kawasaki)」「子ども (Kodomo)」「かかわり (Kakawari)」「気づき (Kiduki)」「権利 (Kenri)」である。どれも本市における参加・体験型人権尊重教育を実施する上で大切な要素である。

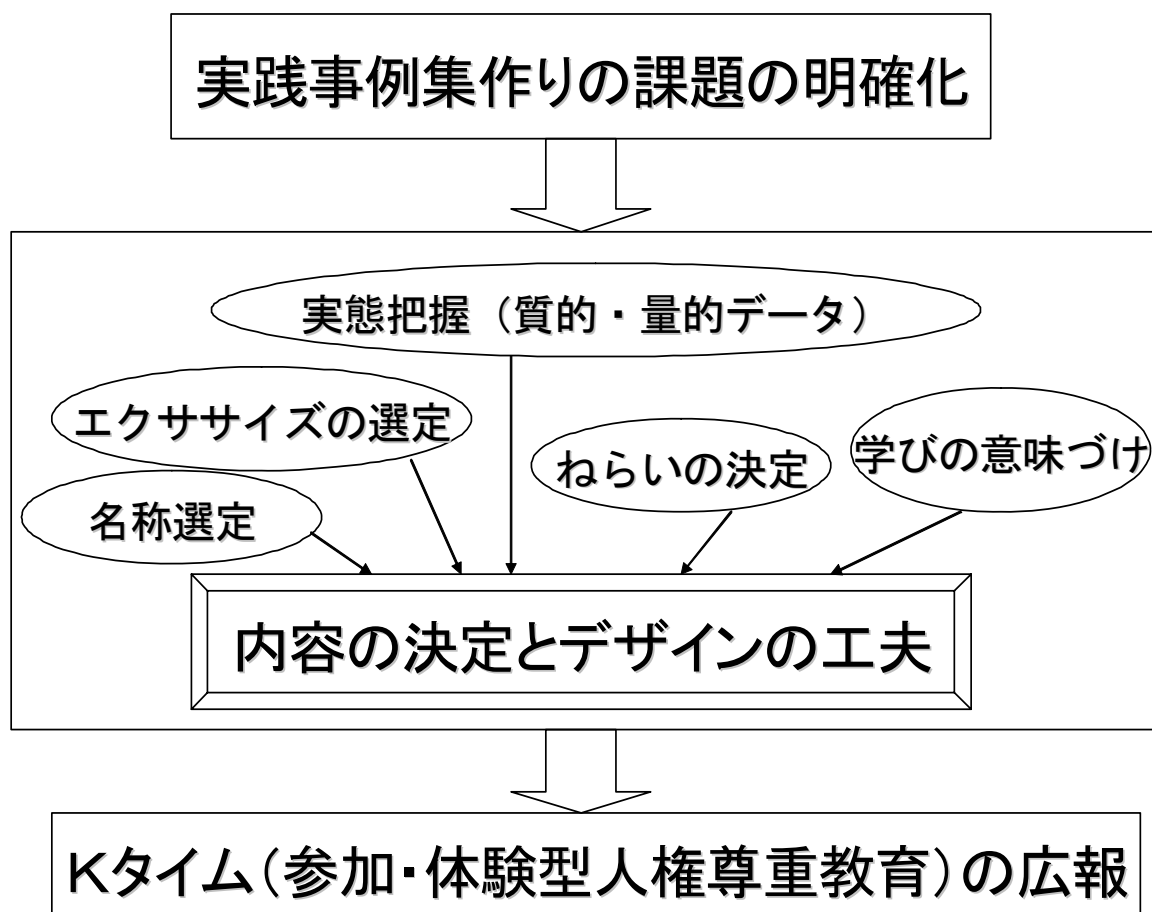


図1 研究の構想図

## 2 実践事例集作りの課題に対する取組

実践事例集作成の4つの課題に対して、次のように取り組んだ。(「←」は実践事例集において特に関連のあるセッションを示している。)

## (1) エクササイズの選定

←「マトリックス」・「エクササイズ8」

エクササイズの選定に当たっては、主に次のようなことを考慮して作業を進め、8つのエクササイズを載せることにした。

- ・ 実践事例集の3つのねらい（自己理解、他者理解、協力）を網羅するエクササイズ
- ・ 様々なクラス状況を想定し、実施しやすさ（難易度）にバリエーションのあるエクササイズ
- ・ 「クラス開き」「学校・学年の行事前」など、様々な時期で使えるエクササイズ

## (2) 実態把握

本実践事例集の5つの特徴の中で、特に「川崎市の児童生徒のためのもの」を重視し、川崎市に関する2種類のデータの収集分析を中心に研究作業を進めた。2種類のデータとは次の2つである。

- ・ 川崎市の児童生徒の実態（以後、Aデータ）
- ・ 川崎市の経験豊かな教師による参加・体験型授業場面（以後、Bデータ）

### ① Aデータ（量的データ）

←「マトリックス」・「実態テスト」

児童生徒の実態は実践事例集のエクササイズを実施する上で、必ず踏まえてはいけないものである。しかし川崎の児童生徒の実態を把握するために新たにアンケートを作成し、実施することは時間的に難しかったため、次の2つの調査データを使用した。

「平成17年度 川崎市小・中学校教育基本調査」<sup>4)</sup>（以下、基本調査）

- ・ 調査実施時期：平成17年5月
- ・ 対象：小学校4年生1,282人、小学校6年生1,265人、中学校3年生1,808人

「教育の確かな営みを推し進めていくために」<sup>5)</sup>（以下、指定都市調査）

- ・ 調査実施時期：平成16年9月
- ・ 対象：小学校4年生、6年、中学校2年生（各学年400人）
- ・ 13の政令指定都市から、合計15,600人

両調査は、川崎市と指定都市における「児童生徒たちの家庭・地域社会と学校における生活と学習についての実態や意識」<sup>6)</sup>「学校や家庭・地域社会における子どもの生活や学習の姿や思い」<sup>7)</sup>を明らかにすることを目的として実施された。25個の設問が同様または類似したものであり、両調査データを比較することで川崎市の児童生徒たちの実態の概要を把握することができると考えた。ただし中学生のデータの対象が、指定都市調査では2年生であるのに対して、基本調査では3年生になっていることは留意すべき点である。

### ア、基本調査と指定都市調査の比較

両調査の結果からは、川崎市の児童生徒は、比較的学校の授業において達成感をもち、前向きに学習に取り組み、学校行事などへも積極的に取り組んでいることや家庭や地域においても、家族とよく会話し、近所の人ともよくあいさつをしている姿がうかがえる。

一方、基本調査と指定都市調査共に、小学校から中学校にかけて、多くの設問で選択肢①<sup>8)</sup>つまり肯定的な回答の選択率が下がっていく傾向があるが、指定都市調査に比べ、基本調査では下がる割合がより大きい設問がいくつか見られた。例えば「あなたは、ふだん家の人と一緒にいるとき、

<sup>4)</sup> 川崎市総合教育センター編（平成18年3月発行）

<sup>5)</sup> 指定都市教育研究所連盟編（平成18年3月発行）

<sup>6)</sup> 基本調査 p 83

<sup>7)</sup> 指定都市調査 p 2

<sup>8)</sup> 選択肢はほとんどの設問において次の形式になっている。

①○○ ②どちらかといえば○○ ③どちらかといえば、○○でない ④○○でない

楽しいですか。」という設問もその一つである。前述のように川崎市の児童生徒は比較的「家庭においてよく会話をしている」が、それと「家の人と一緒にいるとき、楽しい」は必ずしも対応するわけではないということである。自分の居場所を考えたときに、家庭や学校、地域は大切な位置を占める。身近にある家庭や学校、地域が、居心地のよい場所になっている割合は、指定都市研究においても中学になるにつれて減っているが、川崎市の場合は減り方が他に比べてやや大きい。

これは、学校や、家庭、地域におけるかかわりの薄さが要因となっているのではないかと考えた。そうだとすればこの点からも、かかわりの中で他者を理解し、自己の理解を深め、自尊感情を高めていくという人権尊重教育の課題があると考えられる。

また「あなたは、学校にある、みんなで使うものを大切にみつめていますか。」については、小学校においては、指定都市調査よりも①「大切にみつめている」の選択率が高く、中学では指定都市調査とあまり変わらない選択率になっている。これも自分を大切にするとともに他者のことも大切に考えて行動するという観点からすると、人権尊重教育の課題として着目すべきことと考えた。

### イ、基本調査の因子分析

そこで更に基本調査のデータを因子分析<sup>9)</sup>（主因子法、バリマックス回転）にかけた。統計解析ソフトSPSS<sup>10)</sup> version14.0 使用し、解析対象は4,612人（小学校4年生、6年生、中学校3年生）である。その結果、基本調査の川崎市の児童生徒の回答は3因子構造であることがわかった。そしてそれぞれの因子を、次のように定義した。

第1因子「他者とのつながり」、第2因子「家族とのつながり」、第3因子「きまり」

他者とは、家族以外で、主に学校の仲間や教師を意味する。

またクラスタ分析<sup>11)</sup>により、川崎市の児童生徒はABC3つのグループに分けられることがわかった。そして各グループには統計的に有意<sup>12)</sup>な差（ $p < .05$  分散分析<sup>13)</sup>）があることもわかった。

---

<sup>9)</sup> 多数の量的変数の変動を少数の因子とよばれる潜在変数によって説明することを目的とする多変量解析の一手法。（岸本 弘他編『教育心理学用語辞典』p16・学文社・1994年）

<sup>10)</sup> 「米SPSS社が開発した、アクセス統計・解析ソフトウェアの名称である。顧客満足度のサーベイリサーチやマーケティング、売上分析などに好適する。因子分析や回帰分析、クラスタ分析など、高度な解析処理を行うことができる。」

（IT用語辞典バイナリ<http://www.sophia-it.com/cotent/SPSS>）

<sup>11)</sup> 多変量解析の1つで、対象物（データの集まり）をサンプルの類似度（距離）によって、いくつかのグループ（クラスター）に分けるデータ分析/分類手法、あるいはそのアルゴリズムの総称。（情報マネジメント用語事典<http://www.atmarkit.co.jp/aig/04biz/clusteranalysis.html>）

<sup>12)</sup> 統計的に仮説検定においては、標本の統計量の値が、有意水準 $\alpha$ で検定仮説 $H_0$ の棄却域に入った場合に「有意水準 $\alpha$ で統計的に有意である」と表現する。

（中島義明他『心理学辞典』p.854・有斐閣社・1999年）

<sup>13)</sup> 平均値や分散の分布の形についての統計的仮定が満たされると考えられる実験や調査によって得られたデータを分析するための統計的手法のこと。

（岸本 弘他編『教育心理学用語辞典』p244・学文社・1994年）

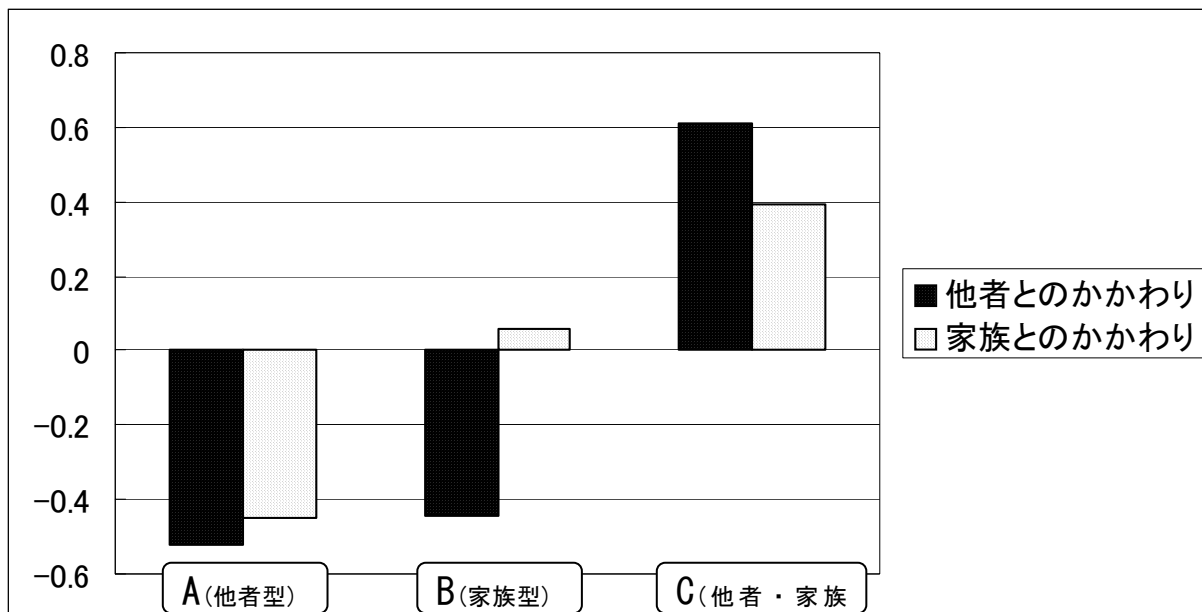


図2 3つのグループと「他者とのつながり」因子・「家族とのつながり」因子 N=4254

図2は、「他者とのつながり」と「家族とのつながり」を各グループごとに表したグラフである。3グループの特徴を「他者とのつながり」因子及び「家族とのつながり」因子から読み取った。Aグループは、「他者とのつながり」も「家族とのつながり」についても低い数値なので「孤立型」と命名した。Bグループは、「他者とのつながり」は低い、「家族とのつながり」が比較的高いので、「家族型」と命名した。Cグループは、「他者とのつながり」「家族とのつながり」が共に高い数値なので、「他者・家族型」と命名した。ただし気をつけなくてはならないことは、「家族型」は、「他者・家族型」よりも、「家族とのつながり」が高いわけではないということである。

またそれぞれのグループの構成人数は、「孤立型」が1,759人、「家族型」が574人、「他者・家族型」が1,291人である。つまり「家族型」がもっとも少ない。図3は各グループの人数の構成を表したものである。

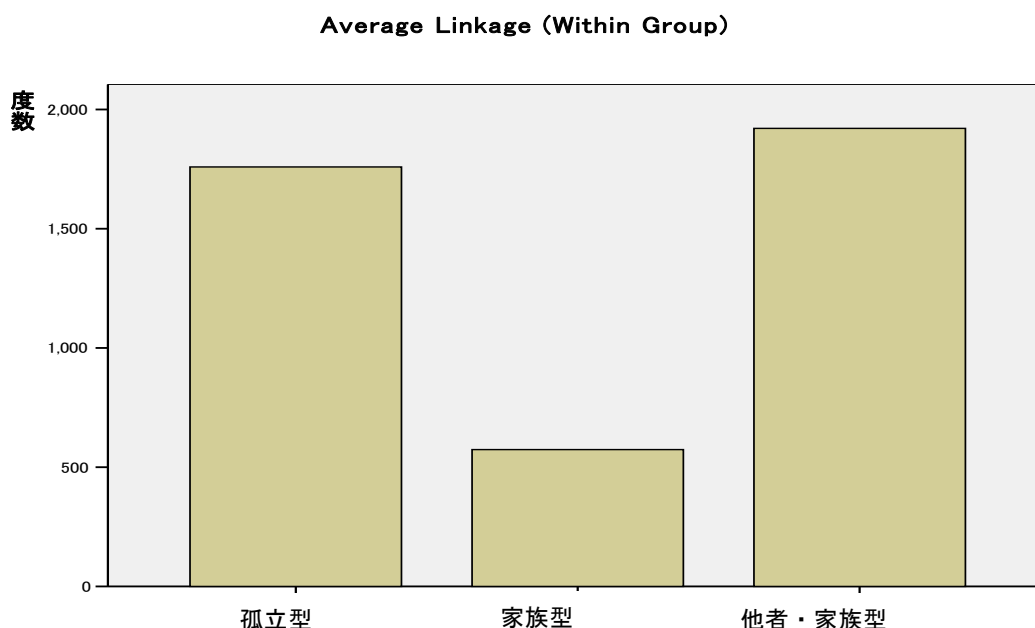


図3 調査対象全児童生徒のグループタイプ別度数 N=4254

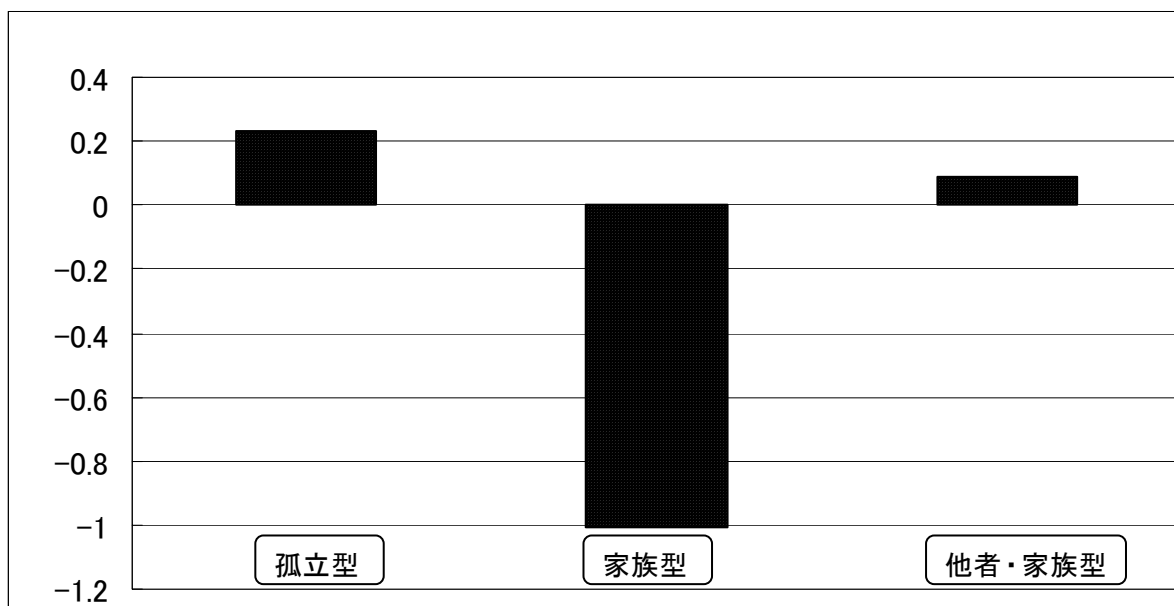
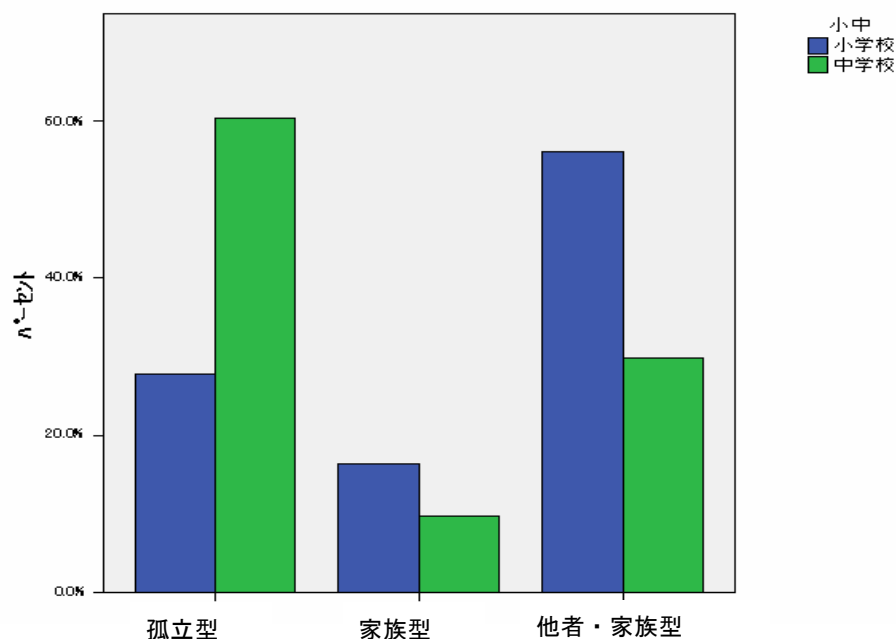


図4 3つのグループと「きまり」因子

N = 4 2 5 4

さらに各グループの「きまり」因子との関連をみた（図4）。「孤立型」グループ及び「他者・家族型」が、「きまり」を守っているという意識が高く、「家族型」グループが低い数値を示している。このことにより、川崎市の児童生徒は「孤立型」や「他者・家族型」が多く、そうしたグループでは、「きまり」を守っていると意識している。「家族型」のグループは、「きまり」を守ることにについてはネガティブな意識をもっていることがわかった。

また小学校と中学校で比べると（図5）、小学校では「他者・家族型」が多いのに比べて、中学校では「他者・家族型」が減り、「孤立型」が増えて逆転していることがわかった。そして「家族型」は減っている。



N = 4 2 5 4

図5 小学校・中学校別 各グループの割合

教育活動において児童生徒の実態を把握して、情報交換を行う場合、話しがきみ合うためには、視点がある程度共通さを有したものであることが求められ

る。基本調査を元にして出された「孤立型」「家族型」「他者・家族型」は、川崎市の児童生徒の実態を考えると、共通の視点となる可能性があると考えられる。



② Bデータ（質的データ）

←「ベーシック情報」・「くわしい森の仲間たち」

Bデータは、川崎市総合教育センターで実施する参加・体験型学習の研修会でインストラクターを務めるなど経験豊かな教師の授業や本市においてSGEなどの研修の講師である岡田 弘（東京聖栄大学助教授）の授業をフィールドワーク<sup>14)</sup>して得たものである。

- ・ 観察目的 参加・体験型の人権尊重教育の授業での工夫についての情報収集
- ・ 実施時期 2006年5月31日～7月11日
- ・ 対象クラス 4クラス、全て小学校
- ・ 対象授業 参加・体験型学習「森の仲間たち」（実践事例集「かわさき Kタイム」参照）  
各クラス1単位時間
- ・ 補助データ 小学校と中学校4クラスで実施された同じあるいは類似のエクササイズ学習の観察

学年	学校番号	採取日	エクササイズ名	場面	カテゴリ番号	内容
5	1	6.19	森の仲間たち	3	8	自分がたぬきさんになってはいけません
5	1	6.19	森の仲間たち	3	8	自分はたぬきさんのおうちを見ているつもりで右側です
5	1	6.19	森の仲間たち	3	8	ヤマネコとトラの家の間
5	1	6.19	森の仲間たち	3	8	板:ヤマネコ、トラの家
5	1	6.19	森の仲間たち	3	8	ヒントタイムを作っていますか
5	1	6.19	森の仲間たち	5	8	(開始5分後にシカの場所を教えた)
5	1	6.19	森の仲間たち	5	8	シカのおうちをみなさんにお知らせします(白地図に書き込む)
5	4	7.11	森の仲間たち	3	8	みんなは5年生ですので、ヒントをあげます
5	4	7.11	森の仲間たち	3	8	グループで一人だけ先生に聞きにきてください
5	4	7.11	森の仲間たち	3	8	(前の班の子をつかって説明)これ正解?
5	4	7.11	森の仲間たち	3	8	白地図を提示して、道に立っていると思って
5	4	7.11	森の仲間たち	3	8	ここに立っているとき、ここのおうちはこっちのおうちのどっち側?
3	7	6.8	森の仲間たち	3	8	間にあるよって情報があります
3	7	6.8	森の仲間たち	3	8	はさまっていれば間です
3	7	6.8	森の仲間たち	3	8	ちょっと聞いていい? 右側ってこっちの赤い屋根のおうち?
3	7	6.8	森の仲間たち	3	8	逆さのときはどうしなきゃいけない?
3	14	7.21	森の仲間たち	3	8	(ヒントなし)

図6 カテゴリー8「ヒント」の1部

※内容は、ほとんど教師の言葉。「板」＝「板書」。( )＝教師の言動の補足説明

フィールドワークの内容は、次の通りである。授業中の教師の言動をできるだけそのまま記録し、カテゴリー化<sup>15)</sup>した。同時に後でそれぞれの言動が、何年生のものか、授業のどの場面かなどの情

<sup>14)</sup> フィールドワークは、大量のサンプルを1回限りで広く調べる質問紙調査とは違い、少数の事例を時間をかけて深く狭く調べる。参与観察を主としながらもさまざまな手法を使う。異文化との出会いのカルチャーショックを大事にする。既存の理論にとらわれず、自分の五感を活用する。(高橋 勝他編著・『教育キーワード137』p.178・時事通信社・1997年)

<sup>15)</sup> カテゴリーは教師たちの言動の中から繰り返し見られるものを中心にして作った。例えば「めあての提示」「ワークシートなどの配付の仕方」「答え合わせの仕方」などである。「繰り返し見られる」とは、必ずしも同じ行為をしていることを意味していない。

報もわかるようコードを入れた。

カテゴリーごとに検索することで、授業における教師の様々な手立てが一覧として見るができるようになり、各クラス（教師）の手立てのバリエーションがはっきりしてくる。図6は、「ヒント」（カテゴリー番号「8」）というカテゴリーで検索した表の一部で、47個（行）あった。「ヒント」について教師が発した言葉を中心に示されている。情報カードの読み取りで間違えそうな表現がほとんどであり、その説明の仕方に様々な違いがあることがわかる。

小学校3年生の教室では、「右側」や「～の間」の意味について時間をかけ、黒板に描いた家にはチョークで色まで塗っていた。小学校5年生の教室では、活動前にグループ内の役割（進行役や記録役）を決めた。また「ヒントタイム」を設定して、答えの一部を教えていた。教師からは児童の実態把握に基づいた手立てであることが伝えられた。

### （3）学びの位置づけ

本実践事例集の学びについて人権尊重教育における位置づけを、「人権教育の指導方法等に関する調査研究会議（座長 福田 弘 筑波大学教育学系教授）」（以下、調査研究会議）の「第2次とりまとめ」（平成17年1月）の内容と照らし合わせることで整理した。「第2次とりまとめ」の中で、「人権教育」（本市では「人権尊重教育」）とは、「自他の人権の実現と擁護のために必要な資質や能力を育成し、発展させることをめざす総合的な教育である。」としている。そして同調査研究会議は、「人権教育を通じて育てたい資質や能力」を示した（図7）。児童生徒につけたい力を、「人権に関する知的理解」と「人権感覚」の2つに分けて考えている。さらに、その2つの力をつけることで、最終的に実践化をめざすとしている。ここで気をつけなければいけないことは、「第2次とりまとめ」の中には、「人権感覚」とともに「人権意識」という言葉が出てくることである。そして、その違いを「人権感覚と人権に関する知的理解が結びついて、人権意識になる」と説明している。つまり「人権感覚」は、「人権に関する知的理解」とともに「人権意識」のベースであるということである。

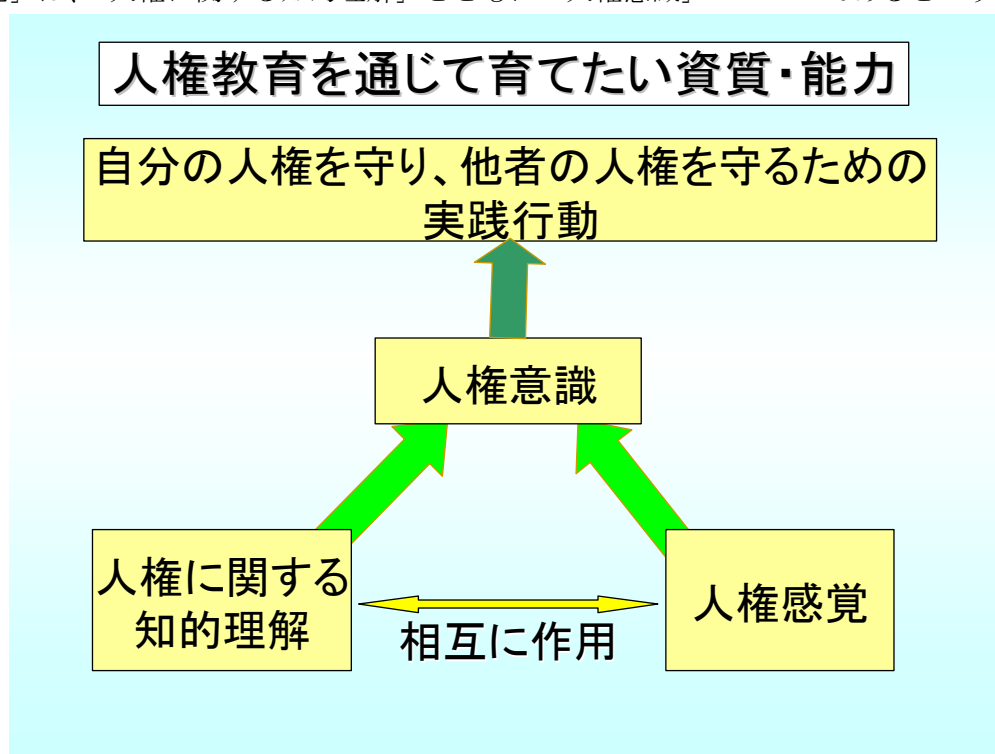


図7 「人権感覚」「人権意識」「人権に関する知的理解」の関係図

これまでの児童生徒指導研究会議が参加・体験型の学習で取り組んできたものを振り返った場合、調査研究会議の言う「人権意識」と「人権感覚」の2つが入っていることがわかる。そこで本実践事例集でも、「人権意識」と「人権感覚」をねらいとする2種類のエクササイズを載せることにした。

「人権意識」を育てるエクササイズとして、「権利の山を作りましょう」と「ちがいのちがいを載せている。「人権感覚」を育てるエクササイズは、「ねえ、どっちがいい」など残りの6つのエクササイズである。冒頭で述べたこれまでに作られてきた川崎市の人権尊重教育の資料は、「人権感覚」を育てることよりも、主に「人権に関する知的理解」を伸ばすものが多かった。そのため本実践事例集とともに、両輪となって、川崎市の児童生徒の「人権意識」が更に高まっていくことに寄与していくものとする。

#### (4) セクションの決定とデザインの工夫 ←「言葉の説明」・「マトリックス」・「アイスブレイキング」

本実践事例集が活用されるには、教師に「見たい」「使いたい」「また見たい」という気持ちをもってもらうことが必要である。それには内容だけでなく、視覚的印象も重要であると考え、次のような事柄にも配慮した。

- ・ 文字数は少なめ、字の大きさは大きめ、紙面に余白を残すようにした。
- ・ イラストを多く入れ、やわらかい雰囲気を出した。
- ・ 内容がわかりやすいように、表紙に目次を入れた。
- ・ 聞きなれないと思われる言葉の説明を加えた。
- ・ ねらいや難易度、クラスの子どものタイプのから、エクササイズを選びやすいように表を作った。
- ・ エクササイズを使えないクラス実態などに備え、簡単心ほぐしができるアイスブレイキングの紹介ページも作った。

### 3 実践事例集の利用イメージ

本実践事例集は、どのセクションからも使えるようになっているが、図8のような基本的な利用を想定して作成した。

#### (1) 基本的なセクション

基本的なセクション（○内）とは、柱となるセクションで、次の①②③の順での使用をイメージしている。

##### 「①実態テスト」

「実態テスト」は、統計処理をしたAデータを利用して作成した。従って児童生徒が25の設問に答えたデータをSPSS（統計解析ソフト）に入力すれば、クラスの児童生徒の実態を把握することはできる。しかしそれは教師の多忙な状況やSPSSが手元にない状況では現実的ではない。教師がクラスの児童生徒の実態を正確に示す指標を作成することは難しい。そのため「実態テスト」で示されるタイプはあくまでも目安である。

しかし、「実態テスト」は、自分のクラスはどんな状態か、どんなタイプの児童生徒が多いのかなどの実態を把握するときの視点を提示している。本実践事例集は経験の浅い教師の利用に対応することを特に想定しているが、実態の把握が大切だと認識しても、どこにポイントをおいたらよいか困るかもしれない。「実態テスト」の3つの設問は、基本調査において川崎市の児童生徒の回答に影響を及ぼしている3つの因子（潜在的な変数）の最も特徴を示す設問である。つまり3つの設問は、川崎市の児童生徒の実態を把握するときの有力な「ものさし」となる可能性のあるものである。「Kタイム」

を行うときだけでなく、日常の教育活動の中でも児童生徒を見取るときに活用できる可能性がある。

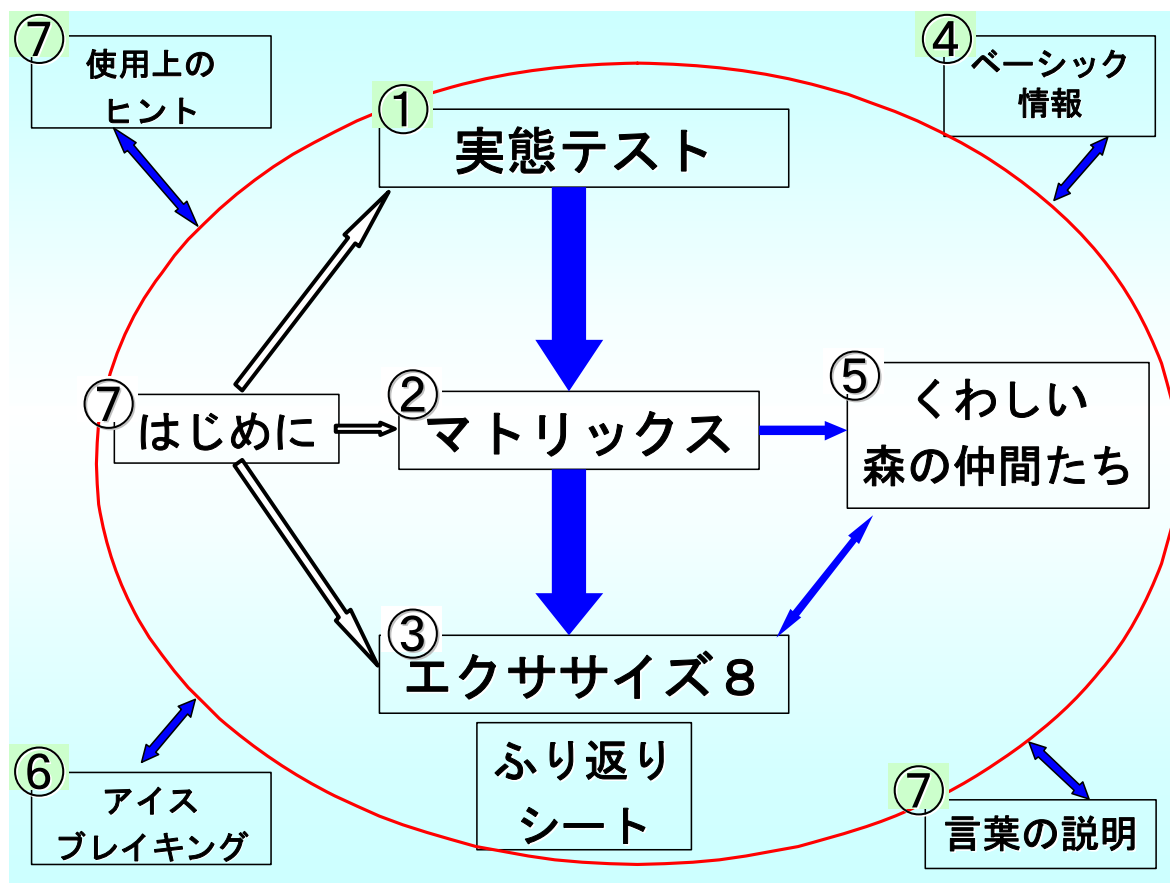


図8 実践事例集「Kタイム」の基本的な利用の流れ

⑦

## 「②マトリックス」

「マトリックス」は教師が、エクササイズを選ぶときに参考にする表である。8つのエクササイズに対して、判断の材料（実態テストから得た児童生徒のタイプに合うねらい、実施し易さ、考えられる実施時期、説明のあるページ、出典）が示してある。

3つのねらい「自己理解」「他者理解」「協力」は、これまでの児童生徒研究会議が人権尊重教育として重視してきた自尊感情と、「Kタイム」実施の中心的時間と想定している特別活動のねらいを考慮して提示してある。「自己を大切に思う気持ち」を育て、同様に「他者も大切に作る気持ち」を育てる。他者と関わり、共通の目的に向かいながら、この2つの気持ちを更に伸ばし、実践化していくことをねらいとしている。また各エクササイズのねらいは、出典に載っているねらいをベースにして分類した。

## 「③エクササイズ8」

できるだけ多くのエクササイズを紹介することに努めた結果、8つのエクササイズを載せることになった。エクササイズを実施するための必要最小限の情報を厳選してある。エクササイズの場面をイラストで紹介することで、エクササイズのイメージを教師がもちやすくした。またワークシートを載せ、すぐに教師がエクササイズを実施できるようにもしてある。同様にふり返しシートも載せた。本実践事例集は小学校1年から中学校3年までの担任教師の利用を想定しており、児童生徒の発達課題についても考慮し、各エクササイズの冒頭部分で、対象学年を示した。さらにエクササイズによっては、ワークシートを複数作り、児童生徒の実態に合わせて選べるようにした。ふり返し

シート（基本形）も小学生と中学生を想定して2種類用意した（児童生徒の実態に合わせてどちらのものを使用してもよい）。ただし、本事例集では紙面の都合もあり、発達課題への対応については今後実践事例集の更新などの際に、より充実すべき点と考えられる。またエクササイズの数できるだけ確保するために説明部分は極力少なくした。

さらに次の点にも配慮した。

- ・ エクササイズの紹介ページの書式を一定にして、説明が少なくてもわかりやすくした。
- ・ 説明部分の少なさを補うため、各エクササイズでも共通の大切な事項をまとめた。
- ・ 一つのエクササイズについて詳しい実施上の説明を示して、他のエクササイズ実施上のモデルとした。

## （2）その他のセクション

基本的なセクションと比べて、それ以外のセクションが大切でないというわけではない。むしろ新規採用教員などには大切なセクションだと考える。

### 「④ベーシック情報」

「エクササイズ8」のページには書ききれないが、どのエクササイズでも大切な情報をまとめて示してある。各エクササイズ実施中に大切な情報だけでなく、日常の教育活動の中で大切な言葉かけなどの留意点も載せた。この中で特に意識して紙面を使ったのが、「ふり返り」である。「エクササイズ8」はどれも比較的児童生徒たちが取り組みやすいもの選ばれている。それゆえ学習後「楽しかった」という児童生徒の感想が表れることが予想される。楽しさは学習に大切な要素と考えられるが、楽しいだけで終わらせない手立てが、この参加・体験型学習では必要である。活動したことをきちんと「ふり返り」、そこでの「学び」に気づく時間がとても大切である。ともすると活動の時間が延び、「ふり返り」の時間が十分にとれない場合も考えられるので、「ベーシック情報」では、特に「ふり返り」の必要性について強調した。

また、多くのクラスには特別な支援を必要とする児童生徒が在籍している点について十分に触れられる紙面がない。「ベーシック情報」の中でわずかであるが示した。対象の児童生徒のためにする手立てとそれ以外の児童生徒に対してする手立てがある。対象の児童生徒が特別扱いを受けていいなと思う児童生徒に対して、「公平感」（各児童生徒の教育的ニーズによって具体的なかかわり方などに違いがあるかもしれないが、大切に思われている点でみな同じである）を育てていくことが大切である。これは特別な支援を必要としている児童生徒のためというよりも、どの児童生徒にとっても人権尊重教育の中心的な課題として位置づけられるべき点だと考える。この点も本実践事例集では十分に示しきれていないが、今後実践事例集の更新の折には重視されるべき点だと考える。

### 「⑤くわしい森の仲間たち」

本実践事例集の利用対象者を新規採用教員などとした場合、「エクササイズ8」の記述だけでは実際の授業場面への情報としては十分ではない。小学生から中学生まで様々な年齢、様々な特徴をもった児童生徒がいる。もう少し詳しい授業場面での手立ての提示、児童生徒の実態に合わせての選択肢などの情報が必要と考えた。しかし8つのエクササイズすべてにそうした情報を載せることは物理的にも無理である。したがってモデルとして一つのエクササイズ（森の仲間たち）について、更に詳しい情報を載せた。ここでの情報は、経験豊かな教師の授業によるBデータをベースとしている。できれば「実態テスト」で得られたクラスタイプ毎や児童生徒の学年に応じた情報が載せられると更に使いやすいが、これも今後の課題である。

## 「⑥アイスブレイキング」

短い時間で心ほぐしができるアイスブレイキングを、エクササイズの前に実施することで、参加・体験型学習を促進する効果がある。またクラスの実態によっては、エクササイズを実施することが難しいときもある。そのようなときには、むしろアイスブレイキングを中心に活用することが適切である。そのためいくつかアイスブレイキングを提示した。

## 「⑦はじめに」「⑦言葉の説明」「⑦使用上のヒント」

実践事例集の位置づけなど、基本的かつ重要な事項や、耳慣れない単語についての説明を冒頭の2ページで示した。またどこから読めばいいのかというときのヒントとして、様々なセクションの簡単な紹介を示し、利用する教師のニーズに応じた活用をしやすいようにした。

## 「⑧表紙」

表紙には「Kタイム」のKに込められた意味がわかるように示した。また目次はあえて、表紙に載せることで利便性を図った。川崎市の事例集ということ意識して、表紙のカットは市内の中学生の作品を使用した（エクササイズのカットも同様）。

# Ⅲ 研究のまとめ

## 1 実践事例集「かわさき Kタイム」

まず手にとって、「ページをめくってみよう」と思い、続いて「授業をしてみよう」と教師が思う内容とデザイン両面になることをめざして作成した。文字数をできるだけ多くしないこともそのための工夫の一つである。

同時に人権尊重教育の参加・体験型学習としてのポイントや実施上の役立つ基本的な情報はしっかり押さえたいと考え、特に、「実態把握」と「ふり返し」を重視した。本実践事例集はマニュアルではないので、書いてある通りに実施すればいいという性質のものではない。自分の担当する児童生徒の実態に合わせて実施することが不可欠である。しかし何をどのように「実態把握」するのかと考えたとき、学校現場では意外とまだ整備されていない。そのためその糸口として川崎市の児童生徒のデータをもとにした「実態テスト」を作成した。正確に児童生徒の実態を把握するというよりは、実態把握のための視点の提示である。またエクササイズでの活動を単なる遊びでなく、学びとして高めるのが「ふり返し」であるにもかかわらず、エクササイズに多く時間を取り、「ふり返し」に十分時間を取れなくなることも考えられる。また「ふり返し」の仕方が児童生徒の実態に合わないこともある。そのために「ベーシック情報」では特に、「ふり返し」のためにスペースを当てた。また2種類の「ふり返しシート」を作成して載せた。新規採用教員だけでなく多くの教師に、本実践事例集を通して、「実態把握」や「ふり返し」を大切にして参加・体験型人権尊重教育を更に展開してもらいたいと考える。

参加・体験型人権尊重教育の本実践事例集は、川崎市立学校の全教師に1部ずつ配付される。自分のクラスの授業づくりだけでなく、学年会や校内研修で共通の資料として活用することで、人権尊重教育に対して教師間で更に共通理解が得られることを期待している。

実践事例集「Kタイム」を「手元において時々活用しようか」と多くの教師が思い、それがきっかけとなってすべての教育活動において、川崎市の児童生徒のために人権尊重教育が更に展開されていくことを願っている。

## 2 実践事例集配付後の課題—実践事例集を活用するために—

教師に活用してもらえそうな実践事例集が完成してもゴールではない。実践事例集を使うことで、

「人権感覚」などが児童生徒の中に育つ参加・体験型学習が、川崎市の小中学校に広がることが重要である。それでは実践事例集の配付後に、大切なことを次のようにまとめた。

- **実態の把握**

児童生徒の実態把握を重視してきたことは既に述べた。できれば実態把握についての客観的なデータが簡単に得られることが望ましい。そのために「実態テスト」を作成した。しかし本研究で利用した基本調査は、人権尊重教育への活用を特定して作成されたものではない。今後、川崎市の人権尊重教育のためのデータをもとにした実態把握のための指標(実態テスト)の開発が求められる。実態には、児童生徒個別のものクラス集団のものがあり、両方の指標が必要である。

- **実態に応じた手立て**

実態に合わないエクササイズを選択や授業の仕方をした場合、かえってクラスによくない結果を残してしまう。(1)の指標を使って児童生徒の実態を把握し、それぞれのタイプの児童生徒やクラスにはどんな手立てが有効なのか検証していく必要がある。この作業には、Bデータのようなフィールドワークが有効だと考える。本研究では、経験豊かな教師の手立ての発見までだったが、児童生徒の実態を示す(1)の指標を絡めることで、児童生徒の実態に応じた手立ての例示をすることができる。

また、特別な支援を必要とする児童生徒や日本語によるコミュニケーションが不十分な児童生徒を想定した手立てについても、例えば教師からの情報が入りにくい児童生徒のために授業の流れを掲示(或いは板書)するなどのように、エクササイズ実施時に必要な具体的な手立てを集積していくことが求められる。

- **学校全体での実践**

人権尊重教育では特に、学びの積み重ね、そしてクラス内外での人権尊重的なかかわりが大切である。そのため参加・体験型学習もクラス内という視野だけでなく、全校で系統的にとらえて実施することが必要である。そこには地域性という視点や小・中の連携、更には幼稚園・保育園と小学校の連携などの視点、保護者との連携という視点も必要になる。特に地域性に関しては、どの児童生徒にも同じ手立てをすることが必ずしも教育的平等を実現するわけではない。児童生徒に応じた手立てを考えた場合、地域性についてより意識的に取り組んでいくことも大切だと考える。地域性から生じる児童生徒の実態をどのように把握して、学校全体でどのような手立てをしていくのか共通に確認しながら人権尊重教育を展開していくことが重要である。

- **実践事例集「かわさき Kタイム」の更新**

本実践事例集が配付された後、改善していくポイントが見えてくると考えられる。数年に1度は、川崎市の児童生徒の実態に合った実践事例集になるために、有効なエクササイズや実施上の手立てなどが加筆修正できるように実証的研究を続けていくことが必要である。特に発達課題に応じた情報(エクササイズ・手だて)の提供が必要である。

- **参加・体験型学習を中心とした人権尊重教育のプログラムの開発**

以上4点の内容を網羅したプログラムの必要性が考えられる。この場合、本事例集では特に特別活動での実施を対象としているが、他の教科や領域、総合的な学習の時間との連携も必要である。

また「実態に応じた手立て」については、プログラム化の柱になるだけでなく、「Kタイム」配付と同時に校内外での研修を通じて、「Kタイム」実施上の重要事項として取り上げられる必要がある。

最後に、研究を進めるに当たり、多くの方々にお世話になりました。ご支援、ご助言をくださいました講師の方々、また、校長先生を始め学校教職員の皆様、データの収集から分析に協力して下さった皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

#### 【参考文献】

坂野 公信監修	「学校グループワーク・トレーニング」	遊戯社	2003 年
国分康孝・国分久子(総編集)	「構成的グループエンカウンター事典」	図書文化	2004 年
大和市教育研究所	「研究紀要 第55集 社会性を養う人間関係づくり」		2004 年
小塩 真司	「SPSSとAMOSによる心理調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで」		2004 年
秋葉 昌樹	「教育の臨床エスノメトロジー」	東洋館出版	2004 年
諸澄 敏之編著	「みんなのPA系ゲーム」	杏林書院	2005 年
人権教育の指導方法などに関する調査研究会議	「人権教育の指導方法等の在り方について [第二次とりまとめ]」		2005 年
小塩 真司	「研究事例で学ぶSPSSとAMOSによる 心理・調査データ解析」		2005 年
秋田 喜代美他	「教育研究のメソドロジー」	東京大学出版会	2005 年
川崎市総合教育センター	「平成17年度 川崎市小・中学校教育基本調査」		2006 年
指定都市教育研究連盟	「教育の確かな営みを推し進めていくために」		2006 年

#### 【指導助言者】

東京聖栄大学助教授 (川崎市総合教育センター専門員)	岡田 弘
川崎市教育委員会総務部主幹人権・共生教育担当	田中 真喜男
川崎市立小学校児童指導研究会長 (川崎市立古川小学校長)	大沼 誠一
川崎市総合教育センター指導主事	江間 薫

#### 【研究協力者】

川崎市立新作小学校教諭	森下 保幸
川崎市立新作小学校教諭	篠塚 可奈子
川崎市立京町小学校教諭	堤 康一
川崎市立桜本小学校教諭	長井 典子
川崎市立平小学校教諭	平井 育子
川崎市立向丘小学校教諭	中島 智美
川崎市立野川中学校教諭	花形 晋
川崎市立今井中学校教諭	川野 佳秀
川崎市立上丸子小学校職員	
横浜国立大学大学院生	宮澤 俊彦
川崎市立生田中学校生徒	坂本 夏美
川崎市立生田中学校生徒	依田 香菜子



## <ダウンロード資料>

以下の資料が必要な場合はクリックしてください。

- |                          |          |
|--------------------------|----------|
| ☆ 実践事例集「かわさき K タイム」      | …PDF 形式  |
| ☆ ワークシート（「かわさき K タイム」用）  | …WORD 形式 |
| ☆ ふり返りシート（「かわさき K タイム」用） | …WORD 形式 |
| ☆ アイスブレイキング集             | …PDF 形式  |